# 電子カルテ・PACS統合型
# 電子カルテシステムの導入

医療法人社団　聖心会　外科胃腸科　奥村医院

【初めに】

外科胃腸科奥村医院は1972年8月、有床診療所として開院し、79年に導入したレセプトコンピュータを皮切りに、段階的な装置の電子化を進めて参りました。

1989年にはPACSを導入、内視鏡装置を電子化し、フイルム管理からコンピュータ管理に移行し、95年には臨床検査センターとのオンライン連携を実現し、患者の検査データはシステムで管理できるようになり検査成績の時系列的把握、グラフ化、紹介状の作成等も容易に行なう事が可能となりました。
2000年には電子カルテを導入、電子カルテとPACSを初めとする院内の装置をLANで接続し、患者情報管理の一元化と、受付から会計までを統括する診療支援システムを運用開始しました。

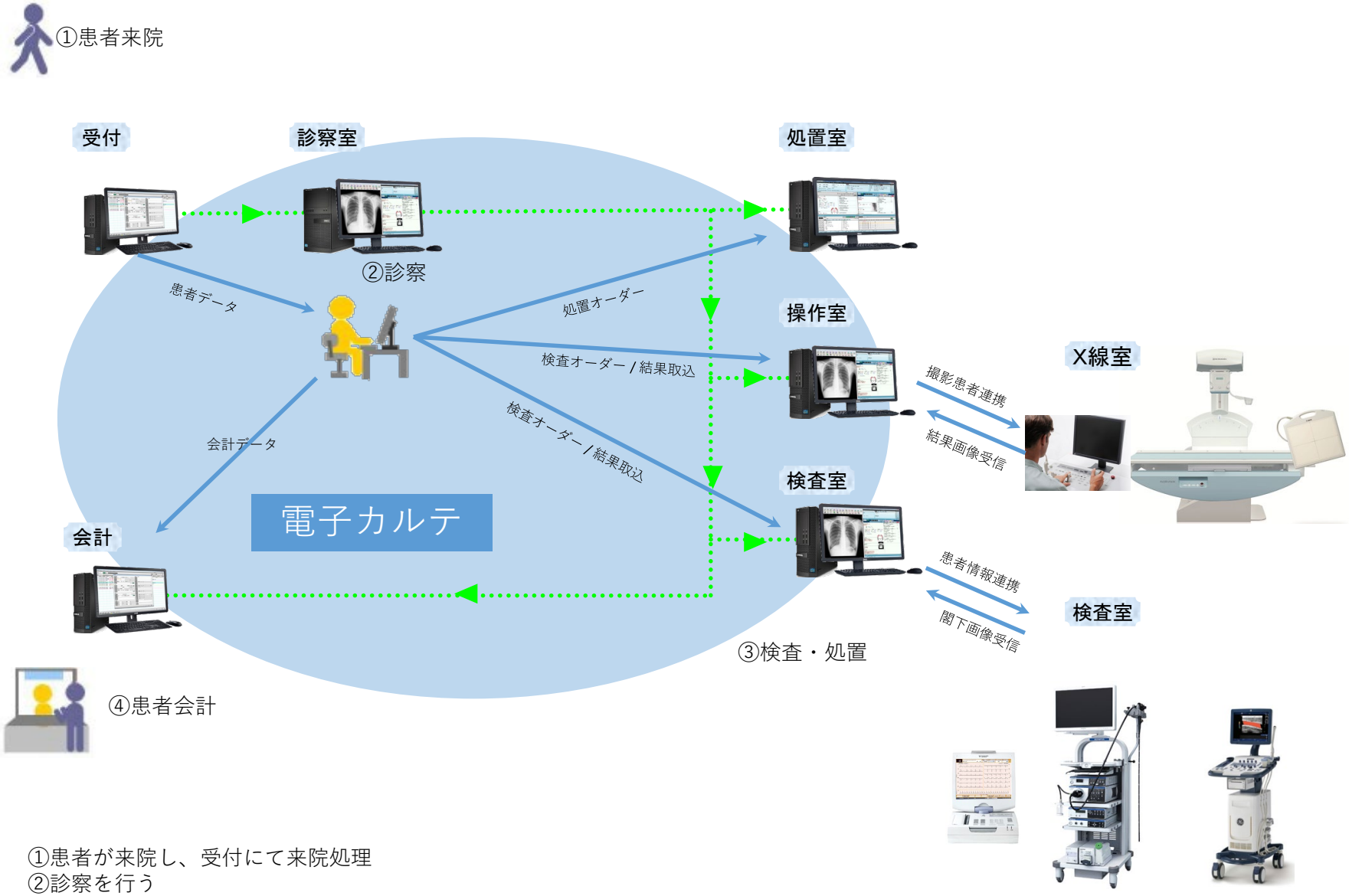
しかしながらこの当時はX線撮影を行った際は一度フイルムに焼き、それを専用のスキャナにてデジタル取込を行っておりました。
また、それぞれのシステムについても連携において手間がかかっておりましたので、システムの新調を行いました。

【更新】

2015年にFPD搭載X線テレビ装置（FPD：Flat Panel Detector）を導入し、レントゲン装置を完全にデジタル化、翌2016年には電子カルテを更新、電子カルテとPACSを融合した島津製作所の『SimCLINIC T3』を導入しました。
これにより、パソコンの台数の削減と保守費用などのランニングコストの低減、検査装置との連携がさらに改善され、データを一元管理出来るようになりました。
この電子カルテシステムは患者情報や処方・病名の内容だけでなく、レントゲン写真や内視鏡検査の写真、超音波検査の写真等も一緒に電子カルテに取り込むことができますので、電子カルテの端末があるところではその患者の情報が一目ですべて確認ができるようになりました。

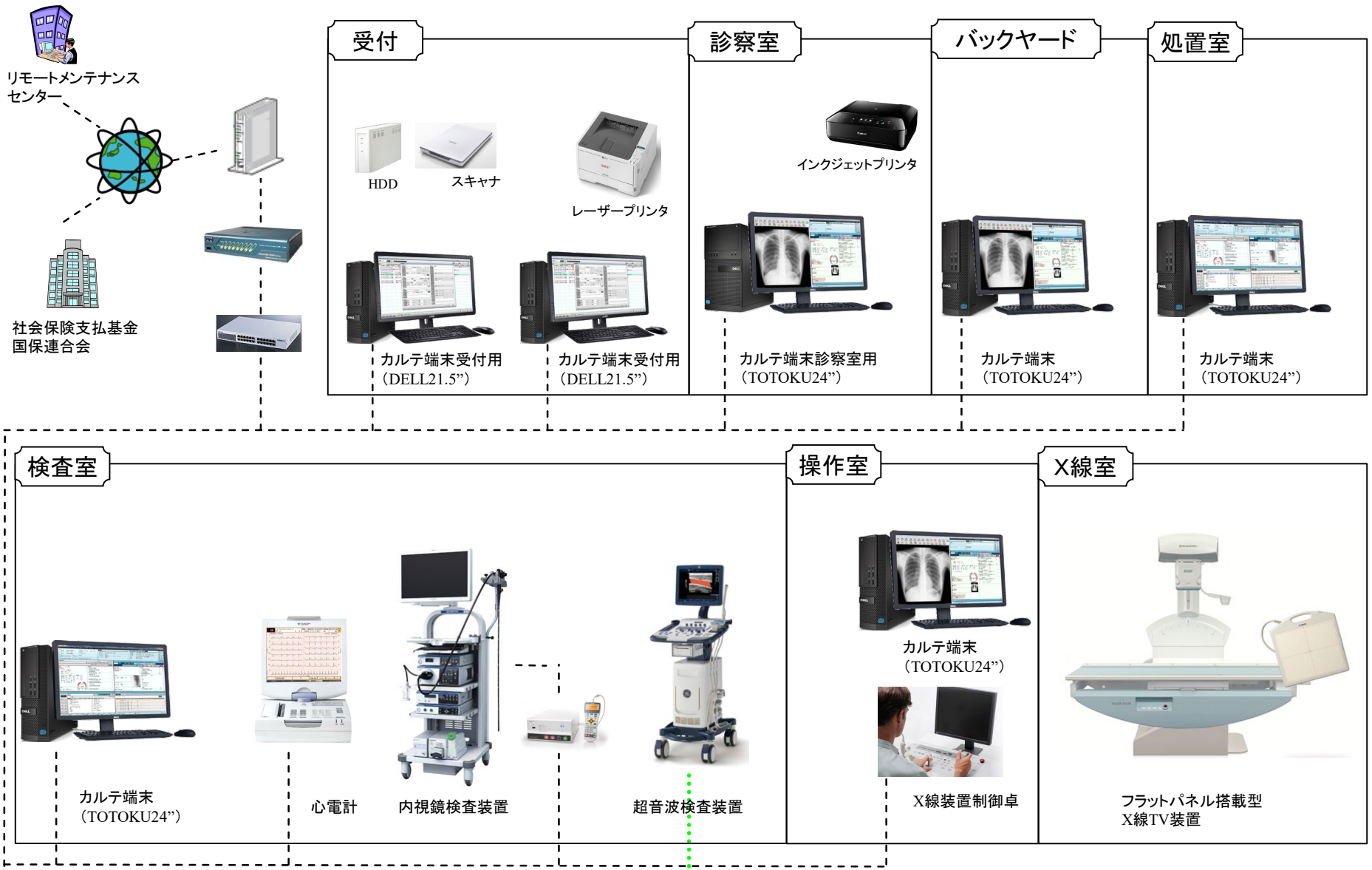
電子カルテにすべての情報が集約され、一元管理されることでこれまでよりもさらにシームレスな運用を行えます。

# 医療法人社団聖心会 外科胃腸科奥村医院　経路図

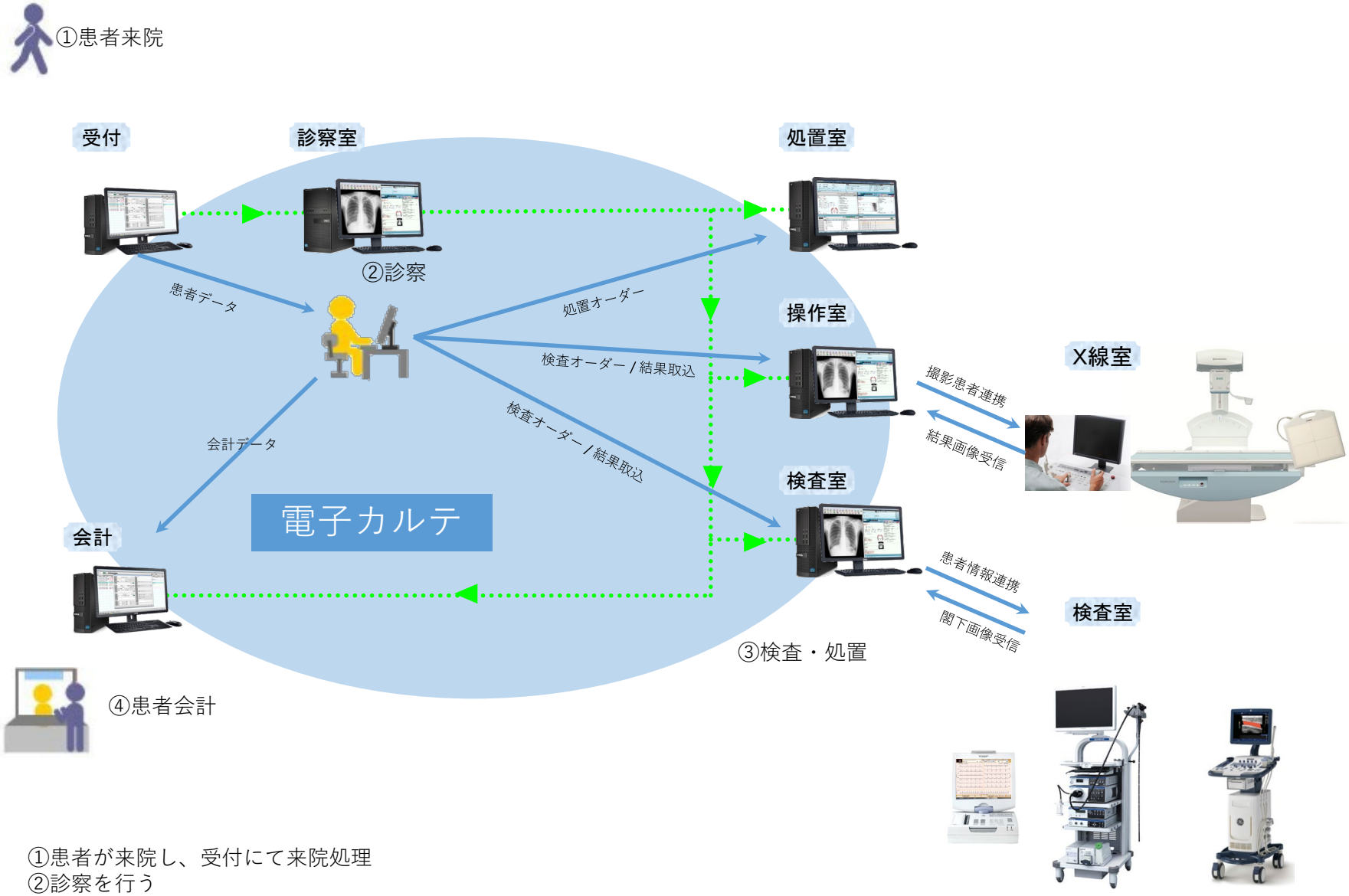



①患者が来院し、受付にて来院処理
②診察を行う
③診察時に必要となる検査や処置を実施。各検査画像は電子カルテに集約される
④保険点数がオーダーから自動計算され、会計処理

# 医療法人社団聖心会 外科胃腸科奥村医院　構成図



# 医療法人社団聖心会 外科胃腸科奥村医院　フロー図(Fig.1)




①患者が来院し、受付にて来院処理
②診察を行う
③診察時に必要となる検査や処置を実施。各検査画像は電子カルテに集約される
④保険点数がオーダーから自動計算され、会計処理